



Meadows, D. H., D. L. Meadows, J. Randers and W. W. Behrens, *The Limits to Growth*. Universe Books, New York, 1972.

これは最近新聞でもよくとり上げられているローマクラブ (Club of Rome's) の報告書の原文である。

内容はすでに各方面で紹介され、またタイトルが端的に示しているように、人類の経済成長が遠からず限界に達することを示そうとしたものである。

全体は序文と五つの章：I. The Nature of Exponential Growth, II. The Limits to Exponential Growth, III. Growth in the World System, IV. Technology and the Limits to Growth, V. The State of Global Equilibrium からなる。ローマクラブ executive committee のコメントがついている。小型の本で 200 ページ足らずの量であるから、モデルの技術的細部は省略され、予備知識なしで読めるようなやさしい説明がなされている。

まず最初に指数的成長の性質が強調されているが、指数的成長すなわち幾何級数的増加の脅威ということは、マルサスを持ち出すまでもなく、最近になって、それが改めて問題とされ、またそれを強調した本書が広く注目されているのはなぜであろうか。それはとにかく成長の限界が、いまや抽象的な一般論としてではなく、はっきり現実のものになりつつあるという点にある。第 2 章で示されているように、現在の勢で成長が続くとすると、重要な資源はかりに現在までに知られている量の 5 倍が発見されるとしても今後 20~100 年で枯渇してしまう。また人口が現在の率で増加すると、かりに農業の生産性が 4 倍になったとしても、2050 年ごろまでには可耕地はつきてしまう。また CO<sub>2</sub> や熱による環境汚染も急速に進む、そこであらゆる点から考えて現在のような成長は、今後 100 年は続けられないということになる。100 年以内ということは、他の研究によっても確かめられている数字のようであるし、とにかく人間が計算に入れるべき“近い将来”を意味していることは間違いない。

そこで今後何が起こるであろうかを、人口、資本財、食糧、資源、および汚染の五つの要素に大きくまとめて、それらの量的な関係をモデル化して計算

したのが、第 3 章である。それによれば 2000 年ごろを境にして、生活水準に急激な反転が起こり、人口もその後何十年かけて減少に向かうことになる。もちろんこの結果は著者達が認めているように、多くの仮定と不十分なデータにもとづいているので、精密な予測というにはほど遠いが、ことの重大性を明示するには十分である。

第 4 章ではこのような成り行きを技術の発達によってくいとめる可能性について論じているが、結論はかりに技術的な進歩に関して、最も楽観的な仮定をとり入れたとして、本質的な点では変わらないということになる。結局破局を避けるには、人類が成長を自発的に止める以外にはない。

そこで何らかの手段によって成長を止めた場合に、どのような均衡が達せられるかを論じたのが第 5 章である。もちろんその場合、人口増加を止めるだけでは不十分である。そこで 1975 年に人口増加を完全に止め、1990 年には工業の資本も増加させず、また資源の消費率を単位工業生産当たり 1/4 に切り下げること成功したとすると、均衡を完成することができるが、そのときの 1 人当たり所得は 1,800 ドルの水準となる。他の可能性もいくつか論ぜられているが、とにかく急激に強力な政策がとられない限り破局はくい止められないということを示している。

私は、この本に書かれていることの正確性について、改めて批評することはできないが、たとえ細部はどうあれ、この本筋においては正しいと思われるし、それだけで問題の重大性を知るには十分であると思われる。もちろん今後、事実関係についてもっとくわしい分析がなされることを強く望みたいと思うが、しかしわれわれとしては、このような状況判断のもたらす、政治的、経済的、社会的、文化的各方面への影響、それぞれの分野でのいわば大前提の再検討について深く考えてみるべきであると思う。それにしても、こういう本の表面だけをまねた World Dynamics なるものの流行だけは願わくばしない。単に計算機を使っただけの“研究”は academic atmosphere の pollution を増す以外の何の効果ももたらさないであろう。ことは単なる流行として扱うにはあまりに重大である。(竹内 啓)